



俺の妹は

# 中二病 デレ

吸血姫な妹に吸い尽くされちゃう!

小説 千夜詠 挿絵 あここ。

立ち読み版

序章	かくて闇の世界は平定される	006
第一章	現れた美少女は懐かしい香り	009
第二章	金髪巨乳と妖精の残香	052
第三章	メイドの浴室奉仕は危険な香り	090
第四章	体育倉庫のお見合いは痴臭で満ちている	124
第五章	明け方は労働の香り	173
第六章	妹の中二病は背徳の香り	204

## 登場人物紹介

Characters



### か いんほの か 花院穂香

日本人離れしたプラチナ髪の美少女で、日本屈指の大企業の娘という天に選ばれたかのような七郎の妹だが……。



こうやましちろう

### 香山七郎

幼少期に生き別れとなった穂香の兄。苦学生で貧乏ながらも必死に生き抜いてきた実直な少年。



### くりたさき 九里田早紀

花院と並ぶ大企業グループの令嬢。人が嫌がる仕事も率先してこなす生真面目で人望篤い生徒会副会長の一年生。



### さくかわじゅんな 佐久川純菜

穂香に絶対的の忠誠を誓う花院家のメイド。学園では爆乳優等生として男子人気ナンバーワン。

一度唾を飲み込んで、

「ほ、穂香！」

きつく抱きしめた。

「な……っ、い、いきなり、何を……」

妹の声の上擦っている。直接鼓動を感じ、上昇していく体温が伝ってきた。穂香はかなり動揺している様子だが、抱きしめられる行為に対して拒絶を示さない。

（よし、この調子なら、いける！ すまない妹よ、お前の変な中二病設定を利用してもらうぞ）

ようするにご機嫌を取って、この話題を有耶無耶にするのだ。

「こ、こ、このような場所で……、い、いかに我が半身といえど……」

校内で妹を抱きしめている。悲しいこと、嬉しいことがあれば、おかしいことじゃないのだが、誰かに見られるかと思うだけで、ドキドキはどんどん高鳴っていった。それでもやめるわけにはいかない。

抱きしめている状態を解いて、今度は穂香の両の肩の下を掴む。ここまで見せたことのない真剣な顔つきに情熱的な瞳でもって、

「お、俺にも嗅がせるんだ」

と言ってやる。

「へ……っ?! う……うん、いいよ」

ポツと頬を赤らめて、恥ずかしそうに顔を逸らす妹。その瞳に潤みが生じ、少しだけ困ったような表情をする。こんな穂香は再会してから初めて見た。

（ぬお、く、口惜しいが、可愛いすぎるぞ）

これが素なのか、普段の中二病的な振る舞いとは違う、純情な反応にドキドキしてしまう。妹でさえなければ、そんな考えが浮かんでしまい、直ぐに打ち消そうとした。

思惑通りに運びそうで、微かに安堵をしていると、穂香は制服の上着のボタンを外しにかかる。

「ちよ、ちよつと、何を脱いで……」

「ん？ 制服の上からでは、よく嗅げまい。せめて、上着だけでも、と思つたのだが……」

「そ、そうか……、俺はてつきり……」

複雑にホツとした顔をしてしまう。

「……てつきり、なんだ？ ま、まさか、更衣室でもない学校の中で脱ぐ者がいるか！ もし、そんなやつがいたら、そやつは露出狂を通り越して、天、魔、人の世界で語り継がれる伝説のアホの子に違いない」

「だ、だよな」

何故か、森の中で見た妖精の姿が浮かんだ。

「そ、そんなことより……」

後ろ髪をうなじから上げるように、両手を首の後ろに穂香は組んだ。

「さあ、ど、どこからでも、好きなところから嗅ぐがよい」

頬を染めた羞恥を気恥ずかしそうな顔の妹は、少し上目遣いになって、求めるように視線を送ってくる。

聞かれてはまずいことを誤魔化す為にとった緊急回避手段であったが、強烈に誘われてしまった。

もし、こんなところを見つかったら、また変態扱いされてしまうだろう。だが、薄いブラウス一枚で、両手を上げた彼女は、脇の下を開放し、そこから牡を惹きつける芳香が放たれているようだ。

（ああ、なんでこいつはいつも突然……）

色香が増してしまうのか。

「ほ、穂香……」

ふらふらと誘われるままに、近寄って、少女の部位を瞳で追った。うなじ、唇、胸元、脇の下。極上のご馳走を前に唾を飲み込む。

細く微かに汗ばんだ妹の首筋に顔を接近させて、スーっと鼻で吸う。

「ん……」

甘ったるく漏らされる声を聞きながら、甘酸っぱい香りを堪能していた。

（首筋……、うなじ……、産毛も綺麗にしてるんだな……）

可憐な顔を反対に向けながら、穂香の唇は微かに開かれているようだ。熱く吐息を漏ら

して、粘膜を湿らせ、鼓膜に届いてくる息遣いに彼女の興奮を感じてしまう。

どうやらこの校舎裏のこの辺りには、人はあまり寄り付かないようで、近づいてくるような話し声も足音も聞こえなかった。それでも学校の敷地内で、実の妹相手に行うフェティッシュな行為には、嫌でも興奮させられてしまう。スリルがそれを助長させていた。

「はあ……、も、もつと他の場所も、か、嗅いで……良いのだぞ」

漠然と、これ以上続けたら半勃ち状態のものが取り返しのつかないことになるとも考えたが、頭の中は欲求で満たされてきて、遠慮なしに妹の腰を掴んでは、顔を下ろしていく。

「ひゃ……っ、そ、そこっ！　っ……濃い場所……だから……」

擦ったそうに穂香は膝を擦り合わせた。

ほんのりと蒸れた妹の脇の下。ブラウスに微かな熱い湿りを感じ、甘酸っぱい青い果実のように香ってくる。ここには確かにフェロモンが籠っているように思えた。

「スー、ハー、い、いい匂いだ穂香……」

彼女に合わせたのが半分、本音が半分といったところだ。

「そ、そうか……、わらわの匂いは、半身であるそなたの為にあるのだからな」

恥ずかしさと嬉しさが混ざったような声である。

クンクンと妹の脇の下の匂いを嗅いでいると、もう堪え性のない肉棒は完全に硬くなつてしまった。事前に刺激を受けすぎていたせいもあって、衝動が募ってしまう。このまま扱きたてたい、と。

(いやいや、妹相手に、それもこんな変態行為で……、ダメだ、ダメだ、ダメだ……)

事実、興奮してしまっているのに、この欲求に素直になつてしまうのだけは許されぬ。これ以上は、目的から逸脱してしまいそうで、名残惜しさを感じながら顔を離した。

「よ、良かったぞ、穂香」

言いつつ、真っ赤になる。なんて馬鹿な兄だ。

「そ、そうか、うん、それは良かった」

穂香はまともにこちらの顔が見られないようで、斜めに俯きながら、チラチラと視線だけを送ってくる。

ツンデレしたように背中を向けて、

「ま、まあ、昼食の時間だからな。我らの主食である匂いを与えるのは当然のこと。放課後までは、またわらわの匂いを染み付けた下着で我慢するがよい」

「え……っ、あ、うん」

少しかげムツとした顔が振り返る。

「どうも、生返事であるな。……ちゃんと、持っておるのだから？」

切り抜けたはずが、一気に追い詰められていた。今度はバツが悪そうにこちらが視線を逸らす。

「も、勿論だよ」

細めた瞳でジーンと見られている。完全に怪しまれていた。



「見せてみよ、わらわの下着」

「あ、いや……こ、ここには、ない。そ、そう、鞆、鞆の中に……」

穂香はスマートフォンを取り出した。

「今すぐ、純菜に確認させる」

「ごめんさい、なくしました」

人生最高レベルの美しいお辞儀をしていた。

頭を下げたまま、沈黙の時間のうちに、一陣の風が流れていく。遠くから、楽しげな学生生の喋り声が聞こえた。

強烈な殺気を感じて、顔を少しだけ上げてみると、

「ヒ……っ！」

闇の姫様に相応しい邪悪なオーラが妹を覆っていた。

「な、失くした……だと」

腰を抜かした状態で尻餅をつく。ずるずると後退しながら、壁際に追い込まれた。

「わ、わらわが、どんな想いで……、覚悟はできているのだろうか」

「ま、待て穂香……。は、話し合おう、なっ……」

半分泣きそうな怒り顔の妹。だが、彼女の視線がふとこちらの股間を捉えると、表情は一変した。

「ほほう……、そういうことか。そんなにわらわにお仕置きして欲しかったのか」

フツと口角を上げた穂香は、どこか嬉しそうだ。

なにが突然彼女のご機嫌を取ってくれたのか、視線を追うと、そこには完璧に膨らみきった股間がある。

「いや、こ、これは、そういう意味じゃなくて……、つて、どういう意味？ ああ、分かんねえ」

一人混乱の内に沈んでいると、不意に妹は、投げ出された脚の上に座ってきた。温かく柔らかなお尻の感触が伝ってくる。

「え、えっ……何を……」

「ふふ、いいから、わらわの靴を脱がせよ。ほら……」

片足がこちらに伸ばされ、今にこちらの顔を踏みつけるほどに迫ってきた。もう仕方ないので、言われるままに靴を脱がせてやる。すると、急かすようにもう一方も伸ばしてきて、やつぱりしぶしぶ言う通りにした。

「靴下もだ」

何をさせたいのか一抹の不安を覚えながら、白いニーソックスを引き抜いていった。透き通るような穢れなき素足はほんの少しむくみ、靴下とそこは微かに蒸れた香りがしてくる。

妖しげな微笑を見せながら、大きく両脚を開く穂香。

（うわア、パンツ……丸見え……）

先程、生の女の子自身を見たばかりだったが、薄ピンクのショーツのクロッチが内側に僅かに食い込むように張り付いていて、微かに縦スジのラインが浮き出ているその光景にしっかりと興奮してしまう。

「では、お待ちかねのお仕置きをしてやろう」

妹は膝を折って、足の裏を重ね合わせるようにしながら、膨らんだ股間の位置に移動させた。足の指が器用に動き、ベルトが外され、ファスナーにかけられてくる。

「お、おい……、や、やめろって……」

「そなたに拒絶権はない。それとも、ここで大声でも出してやろうか？」

ここが普段人の寄り付かない場所であっても、流石に誰か駆けつけてくるだろう。その時、その人物が見る光景は、兄の上に妹が乗っかって、股間を広げている状態。彼女からしていることであっても、妹まで恥ずかしい想いをさせるわけにはいかない。

「そなたは、黙って、わらわの靴下の匂いでも嗅いでおれ。ほれ、せぬか」

完璧に妹の玩具にされている。兄のプライドがそれを許すかというところ、言われるままに左右のニーソックスを鼻に押し当てた。

（こ、これは……、ご機嫌を取っておく為、け、決して、嗅いでみたいって、これっぽっちも……、んはっ）

男の靴下とはまるで違う、美少女の甘酸っぱい足の匂い。聞かれると色々不味いこともあって、従順になりながら、恍惚感が湧いていった。

「くくっ、邪気が溢れておる。ほらっ……」

つんと足の指先で、膨らみきつた場所が突かれる。ピクンと強張りを跳ねさせて、刺激が心地よく染み込んでくるようだ。

(うわァっ、穂香の足で、反応しちまう。可愛い、妹の足……)

楽しそうに見下ろしてくる彼女は、印象を一変させ、妖艶な笑みを浮かべている。

足の指先がボクサーパンツにかかった。巧みにゴムを伸ばし広げる妹の興奮した息遣いが聞こえてきた。

気付くと、下着まで下ろされて、雄々しく勃った肉棒が外気に晒されていた。刺激を受けすぎていて、疼いてしまっている。血管を浮き上がらせ、パンパンに腫れあがった亀頭の先からカウパーが滲み出していた。

「もう、こ、こんなにさせおって……、猛り狂った魔王め、わらわが成敗してくれる」

片足が強張りの裏筋を摩ってくる。皮の厚い足の裏であるが、角質は少なく、ふにふにと程よい弾力があつた。

「くう……っ、だ、誰か来ちゃうよ、穂香……」

「心配はいらん。今頃は、殆ど<sup>ほとん</sup>どの学生は、学食に向かっているか、教室で弁当を広げておるだろう。もつとも、あまり大きな声をあげると……」

悪戯な笑みを浮かべる穂香。その余裕な態度を見るに、先程の言葉は事実には違いない。それでも、校内で白昼堂々と猥褻な逸物を曝け出している身としては、気が気ではなかつ

た。

僅かに圧力をかけながら、優しく踏みつけてくる妹の足の裏。すべすべした感触と微かなざらつきが、心地よく熱くなりすぎた肉棒に染み込んでくる。

（うわァ、き、気持ちいいぞ、これ……。女の子の体って、こ、こんなところも、やらしくできてるのか？）

穂香の足の指先に、カウパーがついて、ぬちゃぬちゃした音が響きだした。滑りが良くなってくると、両足で肉棒は挟み込まれ、包まれるように扱かれる。

「はあ、はあ、こ、こんなにスケベな汁を出しおって……。さしもの魔王も、わらわに足蹴にされては、ひとたまりもないようだ」

敏感なカリ首が震わされると、先走りの男の淫水が壊れた水道のように絶え間なく漏れ続けた。足の裏から受ける刺激に翻弄されて、自慰を我慢していたせいもあって、このまま妹のしたいようにさせてしまう。

（うっ、うう……。いつそ、早く出させてくれ……。で、でも、こんなところ、誰かに……。）  
溢れかえりそうに溜まり込んだ欲求を噴出してしまえば、妹もきつと解放してくれるだろう。その瞬間に、周りに人がいないことを望むばかりだ。

自分から、一層の刺激を求めて、握り締めたニーソックスの匂いを嗅いで、視線は妹の開放された股間に集中させた。

完璧な変態の図が完成している。悲しい事実だが、後々のことを考えれば逃げ出すこと

もできず、興奮してしまっているのも確かだ。

「ふはアア……、足の裏……、気持ちいい……。熱くて、ゴツゴツしたのが、か、感じて……」

菱形を描く穂香の脚の一角に、湿度が増していくのが分かる。

(スー、はあ、はあ……、ああ、ほ、穂香のあそこ……、染みが……)

薄つすらとシヨーツに浮き上がったワレメの陰影を中心に、濡れ染みが広がっていく。じわじわと淫蜜を吸い込んでいく妹の下着は、透けて土手肉に張り付き、肉裂の形状がはつきりとしてくるのだ。

兄がそれを凝視していた。知ってか知らずか、穂香は口元をだらしなく緩めながら、熱く吐息を漏らしていく。

「あはア、妹の足で、んはア、か、感じる変態め、ここ？　ここがいいの？」

ぬずつ、ふにゆふにゆつ、ぬちゆぬちゆ……。妹の足の裏は兄のカウパーに塗れ、更に果敢に攻め刺激される。単調と思えば、気まぐれに左右の位置をずらし、小刻みに摩擦されたかと思うと、肉茎の全てを大きく揺らしてきた。

「うくう……、も、もつと……」

時折湧き上がるもどかしさに、つい欲求を訴えてしまう。

「まあ、何て恥知らずな我が半身……、それとも、この色欲を司る魔王がいけないのか？　ならば、もつとお仕置きせねば……」

くちゆくちゆくちゅっつ——ッ！ 高速に扱きたててくる。

（お、おおっ、来るっ、これっ……射精っ、させられるうう！）

深く荒々しい息遣いをしながら、妹の靴下の匂いを大量に吸い込んでいった。トランスしそうになりながら、どろどろした牡液の発射を予感する。

「ハア、ハア、ハア、へ、変態魔王オチンポっ、ほら、も、もう観念するが、いいっ！」  
可愛らしい妹の声で発せられる卑猥な言葉に、積み重ねられる興奮は頂点へと昇つていく。脚の上で、柔らかなお尻は揺らされて、その温かな重みもまた刺激となっていた。

「くあっ、おっ、おっ、いいよ、これ……っ、だ、出させられるうっ……」

軽く握った拳の親指を口元に置いた穂香は、うっとりとした表情で見詰めている。

ぬちゃ、くつちゅ、ぬずっ……。土踏まずで肉棒は挟み込まれ、捏ね揉まれていった。

「んはあ、さ、さあ、出しちゃって。わ、わらわの足マ○コで、断末魔の白いのっ、ピュピュッと出すのっお！」

妹の足で斜めに立てられた肉棒が、高揚しきった彼女の衝動のままに、激しく揺さぶられる。だからだと溢れるカウパーが、もう穂香の足裏全体を滑らせて、男根に練り込まれていった。

「あ、ああ——っ、ほ、ほんとに……出るっ……、あ、ああっ！」

切ない訴えを聞いたプラチナヘアの美少女は、止めをさそうと全身を跳ね躍らせながら、きつく強張りを圧して足の動きを速めてきた。

込み上げてくる熱いものが、開門を迫って押し寄せてくる。もう、噴き上げたい情動だけに頭の中が満たされてしまった。

「はひゃっ、あんっ、はっ、はっ、足コキっ、気持ちいいっ！ 変態精子っ、こ、ここにかけてえっ！」

ドプツッ！ ドビュルルツッ、ドプドプツッ！

「うっ、うぐううう」

びゅくんっ、びゅくんっ、妹の足裏の中で痙攣を繰り返し、ぐつと膨らんだ亀頭の先端から、大量に放たれるザーメン。脈動しながら撒き散らし、妹の足にどくどくと垂れ続けていった。

（はあ、き、気持ち……いい……。俺、学校で……妹の足で……抜かれちゃった……）

校舎裏に、兄妹が心地よい汗を掻いた後の呼吸音が奏でられている。もう少しだけ、このままで、と思っってしまった。

「はあ、はあ……、んっ……、足が…熱くて、体が、ふわふわしてる。ふふ……、魔王の封印完了。さて、どうやって、このエッチなどろどろを拭ぬおうか」

夢見心地のような顔をした穂香が、ニーソックスを取り返していく。それを使って足を拭い、精液のついたままの靴下を履く様子をポーッと見ていた。

（腹……減ったな……）

たった今まで、何をしていたのか、それを考えるのを理性が拒絶していた。





「まったく、変態様の方際で……」

腕を離れた純菜は一度離れ、裸体にソープを塗りたいくる。白い液体がねっとりとして豊満な女体にかかる光景に良からぬ想像が掻き立てられてしまう。

装ったような無表情で、再び近づいたメイドは、椅子に座ったこちらに向かい合いながら腰を下ろしてきた。脚部を蟹股にしなから股間を開き、石鹸の匂いがする爆乳が顔を挟み込んでくる。

「うぼっ、こ、こでは……っ！」

夢見たようなオッパイに顔を埋める状況に、半分窒息しそうでありながら、自然に表情がだらしなく緩んだ。

「私の胸で、そのいかにも性欲に汚れたような顔を洗ってさしあげます」

素肌とソープの混ざった男を滾らせる香りと、柔らかな温かみに頭部が包まれ、恍惚感が湧き上がる。たぶたぶとした重量感が肩に乗って、人生の頂点に上り詰めた気分だ。

（純菜の、オ、オッパイに、俺……挟まれて……）

くちや、ぷるっ、くちゅっ……。顔が泡立てられ、一層香りたってくる甘い匂い。爆乳美少女メイドは、全身を上下させ、股間が開閉しながら、たわわな尻肉が揺らされる。

「き、気付いていましたか、変態様……。あっ、ハア、あっ、あふっ、私のあそこが、もうぐっちよんぐっちよんだってこと……」

ぬちゃぬちゃと響く音でよく聞こえなかった。頭は完全に逆上せ上がっているようであ

るが、反対に気分は最高である。

「な、なに？ むはっ、純菜のオッパイっ、き、気持ちいいよ」

腕を取られていた先程と違って、今は自由なその置き場所に迷ってしまう。直ぐに抱きしめられる。腰だつて、太股だつて、お尻にだつて簡単に手が届いた。

顔で感じる肌の肌理細やかさ、柔らかさ、温かさ、それを優しく、時に乱暴に掴みたくなつてしまった。

（ああ、こちらから触れたら、怒るかな？ 嫌われるかな？ で、でも……）  
迷っている間に、ツルンと滑つて、純菜の腰がドスンと落ちた。

「きゃ……っ」

一瞬の驚きの後、

「だ、大丈夫？ ……あっ」

大人びた美少女メイドは、こちらの脚の上に座っていて、美顔が間近にあった。純菜は瞳を丸めている。茫然としたまま見詰め合っていた。豊満な乳果実がこちらの胸板に接触して、カウパーを漏らし続ける肉棒の先端が、美少女の腹部に当たっている。

ほぼ同時に二人の顔がポツと赤くなった。

「ま、まったく……愚鈍な変態様です」

「ええッ!! 俺が悪いの？」

「貴方が私の体をしっかりと支えていないのが悪いのです。で、ですから、好きのところ

を掴んでください」

メイドの瞳が微かに泳いだ。ああ、そうか。女の子の方から、恥ずかしいことを言わせてしまったことにやっと気付いた。

「じゃ、じゃあ……」

純菜の手が、肩に置かれてきた。

緊張しながら、でももう我慢できなかつたように、片手を乳房に、片手をお尻に伸ばす。「んア……っ、そ、そうです。変態様らしく、もつと、いやらしい手つきで……」

どこもかしかも柔らかく弾力と張りのある肉体。石鹸で滑りながら、掌から零れる肉果実をゆつくりと揉み始めた。下から持ち上げるようにしながら、柔肌を指先で押し込み、押し返しが心地よく掌に響いてくる。もう一方では艶やかな尻肌を遠慮なしに撫で回し、欲求のまま感触を愉悅した。

「あんっ……、はあ……、そ、そのまま、続けて……」

「う、うん」

メイドが片手を股間の方に伸ばして、ぎゅつと破裂しそうに膨らみきつた肉棒を掴んでくる。そこから腰を上げてきて、

「えっ、ちょ、ちよつと、純菜……」

「へ、変態様は、童貞ですか？」

相変わらずの呼ばれ方だが、これまでと違ってメイドの瞳は求めるように潤んでいた。

「な……っ、ま、まあ、そうだけど……」

恰好悪いかと思いつつ、嘘をつき通せるわけもない。ここまでも、随分とみつももないところを見せてきたのだ。

「そうですか、良かったです。私も、処女ですから。……はうっ」

ぬぢゅ……っ！ 強張りの先端が熱く濡れた粘膜の感触を覚えた。

「じゅ、純菜ア……っ、な、何をして……」

「じ、じつとしていてください。変態オチンポが、う、上手く、は、入って……、はあっ！」  
ぐちゃっ、ぬぷっ。既に淫蜜に塗れている彼女の肉ビラが左右に割れて、きつい粘膜の抵抗感があつた。腰が左右に微かに揺らされ、先端が肉壺孔に潜り込まされる。

（うわア、俺の、先つちよ、純菜の中に、は、入る……）

水滴なのか、石鹸なのか、愛液なのか、判断つかぬものが、肉棒の幹に垂れていく。眉根を寄せるメイドの表情は、嗜虐的ながらどうしても興奮させられて、つい乳果実をきつく握ってしまった。五指の合間から肉が盛り上がり、途端に泣きそうな顔になった純菜であつたが、腰は徐々に沈められていく。

「も、もう少し……、はあ、なんて、凶悪なオチンポ……お、はあ……」

ぬぼっ、ずぶっ！ 亀頭がヌルヌルとした肉壺に呑み込まれた。

今度は簡単に外れそうにないくらいに、ぴっちりとした粘膜壁がカリ首までの先端を包んでいる。純菜はペニスから手を離し、

「ハア、ハア、ハア……、オマ○コ……きつい……」

激しい吐息を耳元に響かせながら、両腕で抱きついてきた。

（純菜の体、すぐく、熱くなつて……、お、俺のが、どんどん……）

こんな綺麗な少女メイドと全裸で抱き合っている。泡立って滑りながら、肌の艶やかな張りが悦に変換されてきた。ぎゅっと押し付けられる魅惑的な脂肪球が濃厚に接触しながら呼吸に緩やかに揺れている。

「ま、まったく、ハア、生意気な変態つ、オチンポ……、私のが、さ、裂けそう……」

毒つきながらも、肉壺口はヒクヒクと呑みこんだ龟头を甘噛みしてくる。まだ先端だけなのに、初めての女の子自身の感触に、蕩けそうな気分になってしまう。

「ほあつ、こ、こんなに……気持ちいい……。これが、女の子……」

ヌズズ……っ！ ゆつくりと沈み込んでくるメイドのお尻。肉棒から直接くちやくちやくと濡れた粘膜がズリ擦られていく音が聞こえてくるようで、快感と興奮がこれまで以上に急速に上昇していった。気を抜くだけで、

（うっ……はあ、直ぐにっ……搾り取られるうっ！）

今、互いに、男と女になっていく。快楽と悦びが爆発しそうで、その想いが指先に込められてしまった。尻肉に痣あざが残るくらいに、きつく握り締め、裾野から乳房を破裂しそうに引き絞った。

「くあつ、ああんつ、いつ、イイっ！」

少し仰け反りながら、泣きそうな顔で純菜の唇が大きく開く。濡れた舌が僅かに突き出され、全身を震わせながら彼女の表情は恍惚を表した。

プチャっ！ ぬぶぷっ——っ！ 肉棒を包んでくれている肉壺口から淫蜜が飛沫をあげ、増した滑りにメイドの腰が一気に落ちる。

「んあア——っ、あつ、あつ……、え、えぐい……いつ」

強張り全体が熱い女肉に覆われて、ゾクゾクと歡喜が体中に雪崩れてきた。吹き出しそうなものを堪えながら、ビクンッと肉棒が彼女の中で跳ねる。食い縛っていたのは、この天にも昇る悦樂が直ぐに終わってしまうのが惜しすぎるからだ。

「くっ、無茶苦茶、き、気持ちいい」

メイドの牝孔は、きゅつと男根に張り付き、全部吸い込まれてしまいそうに顫動しながら舐め回される。

「はあ、はあ、はあ……、変態が感染して、痛いのが、何だか……」

抱きついていた裸体を少し離し、切なそうな、アへる間近の表情を見せてくる純菜。こちらにも、瞳を細め、堪らなく見詰め返す。

「ふう、ハア、な、何だか、なに？」

唇が閉じられなくなつたようなメイドから、だらしなく涎が漏れていった。

「目覚めてしまい……そう。はあ、はあ、せ、責任とってください。私も、責任とって、変態オチンポに、ご、ご奉仕しますうっ！」

ぬぷっ、うっっ！　ぬぷっ、ぬっぶ、ぬっぶ……。見詰め合ったまま、腰を上下に動か  
しだす奉仕メイド。円を描くように爆乳が揺れて、発情した勃起乳首が胸板を擦ってくる。  
球状に肉付いたお尻が、ぷるん、ぷるんと揺れてそれを掴んだ掌も淫靡に感じた。

「あつ、あんっ、はあつ、変態オチンポッ、奥につ、当たって……。き、きついのに……  
あうっ、私のがっ、ハアアっ、マゾマ○コにされちゃいますううっ」

膝の上で官能的な肢体が跳ねる。生々しい少女の体温と接触しながら、腔粘膜にぐちよ  
ぐちよと肉棒が舐め回されて快感が鰻昇りになった。

「セ、セックスしてる……。俺、純菜と……」

初めは辛そうに美顔を歪めていたメイドは、徐々に微熱に浮かされた時のような表情へ  
と緩んできた。

「メイドを狂わすジゴロオチンポっ、あつ、はんっ、あ、あ、本体はMのくせにつ、こ、  
これっ、んっあア——っ、ドSですう」

気持ち良すぎて、純菜の中で肉棒が蕩けてしまう。一つに溶け合うような感覚に、もう  
自分では己自身の状態すら分からなくなってきた。

「はあ、はあ、じゅ、純菜……」

名前を呼ばれるのが嬉しいように、僅かに仰け反りながらメイドは身悶えさせた。目の  
前で大きく揺さぶられる乳実を掴み寄せ、その頂に唇をつける。

ちゅ……。っ、ぺちよ。コリっと痲りきった乳首に吸い付き、舌を夢中で這わせていった。





今でも思い出すと悔しいのか、純菜は口角をぐつと下ろした。

「妹に、矛先が……」

「はい。躑と称しては、叩いたり、まだ肌寒い季節だったのに、裸で外に出したり、私達を使って、嫌がらせをさせたり……。それでも、姫様は私達を庇い、立ち向かう心を一つにしてくれた」

泣きそうな笑みを浮かべるメイドがいる。

「俺は、そんなことも知らず」

「姫様が自分を吸血鬼の姫だと言いだしたのは、その頃です。——貴女たちはただのメイドじゃない。わらわは闇の眷族を統べる七王の一人。そのわらわに仕えるお前達は、誇り高き従者である。見よ、この髪を、この瞳を。これが証である——」

くすつと笑う純菜。

「じゃあ、あいつが中二病になったのは……」

「ええ、子供ながらに、馬鹿げているとも思いました。でも、嬉しかった。この姫様の宣言で、私達は一つに纏まり、そして……」

「魔女を倒した」

「はい。実際には、メイド長の横領の証拠を見つけ、当主様に見せたのですけど。それで、追い出しちゃいました。私達が姫様とお呼びするのは、設定だけではないのですよ。そう信じることで、救われた。今でも尊敬と感謝を込めて、姫様とお呼びするのです」

日記からすれば、半月ほどの出来事だ。

だが環境が変わったばかりの幼い子供にとって、それはどんなに辛く長く感じる日々だっただろう。

（穂香……、お前ってやつは……、やつぱり自慢の妹だよ）

泣きそうになるのを堪えた。一番辛かった時に、傍にいてやることもできず、寂しさを癒やしてやることも、何一つしてやれなかった自分が、泣くことで今の情動を流してはいけないと思った。

「ねえ、純菜……、俺、穂香にどうしてやればいいかな？」

「何も……、ただ、傍にいてあげてください。まあ、過激すぎる接触は、邪魔させていただきますけど」

「はは……」

純菜はそう言うってくれたけど、せめて愛していると教えたい。あくまでも妹としてだが。そういえば、と思い出す。穂香の誕生日が迫っていた。

\*

時計は十一時を回っていた。

メイドらの多くは朝早くから仕事がある為、この時間までには床につく。純菜の場合、専属であると同時に、兄妹が間違いを起こさないように見張りをするといった理由で、かなり遅い時間まで傍にいた。

その専属メイドも、欠伸をしながら自室に戻っていく。

一人きりになって、しばらく間を置くと、明かりを消して、ベランダに出た。

隠しておいた縄梯子を下ろし、流石に三階から、しかも真っ暗で下が見えない状況でマジ怖かったが、これも妹の為と降りてゆく。

地上に到着すると、これも隠しておいた自転車に跨がった。向かう先は敷地の外だ。完璧なセキュリティーに思える外周の門だが、抜け出す手立てはある。

実は幾つかある裏口の一つは、音声認証になっていて、登録された人間なら自由に出入りできた。

合言葉を言う。

「漆黒の断章」

誰が考えたかは想像に難くないが、おそらく一般人には思いつくまい。

花院家の敷地から出ると、通りに一台の車が待っていた。

「七郎様、こちらですわ」

黒いリムジンから顔を出したのは、金髪縦ロールのお嬢様、早紀だ。

ゆったりとした本皮シートの乗り心地は、眠気を誘ってくるが、現場まで三十分足らずなので、仮眠をとるのも控えた。代わりに、用意しておいてもらったドリンク剤をぐいっと一飲み。

「ありがとう、助かるよ」

「いえ、未来の夫の頼みですもの。ああ、何だかこうしていると、逢引のようですわね」  
後部シートの隣に座った早紀がしなだれ掛かってくる。柔らかな温かな双球が押し付けられてきた。

「え、えつと早紀……?」

「ふふ、誰も見ていませんわ」

ドライバースhirtで、運転手がバックミラーを弄って、こちらの様子を確認している。服装からすれば早紀のメイドのようであったが、ニタニタと笑った顔が映っていた。

「思いつきり、見られてるよ!」

今夜のお嬢様の恰好は、紫色の大胆なイブニングドレスのようなワンピースで、胸元の谷間の陰影が濃かった。

「はあ、幸せですわ。学校では、不躰メイド牛と邪気眼猫が邪魔しますもの。わたくし達、ロミオとジュリエットですわね」

「聞いちゃいない。」

ブランド物の香水をつけているのか、ほのかに香ってきて、彼女本来の肌の匂いと混ざって鼻腔を擦ってきた。しなやかな手が伸びて、こちらの太股を摩ってくる。

「お、おい……」

不味いことに、先程のドリンク剤がさっそく効いてきてしまったのか、むくむくと股間が膨らんできてしまう。

「七郎様さえ宜しければ、わたくしはいつでも準備できていますわ。お顔を拝見した途端に、もう、ぐっしより……」

「や、やめ……」

「女に恥を掻かせる気ですの？ 毎晩、七郎様を想って、切ない夜を過ごしてますのよ」  
織細 そうな指先が、大きくなりだしたズボンの膨らみを撫でてきた。

「うわっ！ ちょっと待ってえっ、こんな、とこで……。メイドさんだつて、いるし……」

「関係ありませんわ。それに彼女は、わたくしの完璧な専属メイド。信用して宜しくてよ」  
「いや、で、でも……」

「わたくし、今、穿いてませんの」  
拒絶できなくなった。

ファスナーが下ろされる。金髪美少女のしている前で、剥き出された肉棒は行為の了承を示してそそり立ってしまった。

ワンピースの裾を捲りながら、こちらに背を向けて跨がつてく早紀。白くて形良く肉付いたお尻が迫ったその時、キイツ！ リムジンは急停車した。

「うわアっ」「ひゃアっ！ ……ふア、あ、あんっ！」

いわんこっちゃない。後部座席の様子に気を取られたドライバーが赤信号に気付いて、慌ててブレーキを踏んだようである。

ドスンと令嬢のお尻が落ちて、膝の上に乗ってきた。柔らかな尻肉の感触が足の付け根

にあつて温かい。ただ問題は、

「嘘っ！ は、入っちゃったよ。あ、あれ……なんか、位置が？」

ブルツと豊満な早紀の肉体が震えている。

「くうっ、ハア……、やだ……七郎様のが、あつ、あ……っ、わたくしの、お尻に突き刺さってますうっ！」

肉の強張りを包み込む熱い粘膜の感触は、しっかりと吸着してきて内側のヒダにくちやくちやと摩られていた。

まさかのアナルセックス状態に混乱しながら、前を見ると、バックミラー越しに運転手メイドが大きく瞳と口を開いている。

「さ、早紀っ、早くどいて……」

「だ、だめですわ。時間がありませんもの。お尻なんて、へ、変ですけど、こ、このまま……、ハっ、あんっ」

車の発進と同時に、早紀の腰が上下しだす。

ぬぶっ、ぶぶっ、ぬぶっ、ぬぶっ……っ！ 助手席のシートに手をかけながら、縦ロールの令嬢は、最初から苛烈に尻肉を揺らしまくる。

「ちよ、ちよっと、こんな……車の中で……くっ」

肉棒全体が腸粘膜に包まれる感覚に性的快感は膨らんでいった。アナルの皺孔が肉茎を締め付け、健気な腰振りに捲れ上がった。

「んっばア……っ、お腹の中が、オチンポの形になって……、ハア、ハアアっ！」

間近で自分のメイドが聞いているのも忘れて、のっけからテンションの高い早紀は、夢中でアナルで肉棒を食っていく。

こうなったら簡単には放してくれそうにない。

「く……っ、ここも、こんなに、き、気持ちいい……。うわア、激しっ、すぎ……」

「だ、だって……オチンポが、こ、こんなにお尻の奥をゴシゴシして……ア、はアっ」

「こ、このっ、はしたないぞ、早紀……」

腕を伸ばし、令嬢のぷるんと揺れる大量の脂質の詰まった乳実を掴んだ。刺激を濃く与え、与えてもらって、早く終わらせるしかない。

「あアんっ！ いいですよ。壊れるくらいに、む、無茶苦茶にっ、揉んでえ——っ」

ドレスワンピース越しの感触は、指先が飲み込まれるほどに柔らかく、悦楽を響かせる弾力で押し返してきた。

（っ！ ノーブラっ……、上もつけてなかったのかよ）

下から持ち上げるように両手で揉みしだき、互いに痴戯を愉悅していく。

再び信号待ちで車は止まった。隣の車線にタクシーがやってきて、後ろの乗客が何の気なしにこちらに視線を送ってきている。

「ヒ……っ！ い、いや……ア、み、見られてますわっ、いやアんっ……。あつ、あんっ、あん、アナルセックスうっ、わたくし、オッパイっ、揉まれてますのおっ！」



実際には、後部には黒のスモークが張ってあり、見えはしなかった。豪華なリムジンに興味をそそられただけに違いない。それでもこちらからは相手の顔までしっかり確認できていた。

(やばい……、興奮しちゃう)

簡単に下ろせそうな肩紐。意地悪な劣情に突き動かされて、ズリ下ろしてしまった。

「そんなっ！ おっぱい、見られちゃう。恥ずかしい牝乳が、揺れてるところっ！」

露出性癖のある早紀は、感じまくって一層激しく腰をくねらせてくる。

片手を乳房から離し、美少女の下腹部へと移動させた。裾の内側に潜り込ませると、そこは濃厚に蒸れている。むっちりとした太股をネチネチと助平に撫で回し、淫靡な肉で形成された体の中で、最も猥褻な部分に指先は到達した。

「ああ、早紀……本当に、こんなに溢れさせて……」

「そんな、こと仰らないで……、ダメ、恥ずかしくされて、よけい……よくなっちゃっ」と、クリトリスが包皮を剥いて、肥大していた。土手肉に張り付き、掻き分けてゆくと、クリトリスが包皮を剥いて、肥大していた。

「おおっ、こ、こんなに大きくして……っ、スケベなお嬢様には、お仕置きだ」

肉裂から漏れてくる淫蜜を塗すように、コリコリした肉芽を摘みながら弄くる。

「ヒ……っ、そ、そこっ、敏感ですの。ひ、酷いですわ。ハア……して……」

ぬぶっ！ ぬぶぶ、ぬぶぶ——ッ！ 二つの大きな髪ロールを振り乱し、たぶたぶした

尻肉がこちらの膝上に叩きつけられてきた。捲れるアナルは肉棒を根元まで呑み込んで、直腸の粘膜がカリ首をしゃぶりつくす。

「はあ、はあ、早紀……」

不思議なことだが、破廉恥に乱れるほどに早紀という少女は可愛く見えてしまう。

彼女の首筋に顔を寄せ、滲み出してきた汗をペチャペチャと舌で掬った。

「ふあ、き、気持ち、イイっ……ですわ、イイっ、ですのおっ、わたくしを、も、もつと食べてえっ！」

腰を捻り、顔をこちらに向けてくる早紀。求めるようなアへ顔で、唾液の煙る口内を見せながら半開きの唇を近づけてくる。

「ぺちや……っ！ 濡れた舌先が伸ばされてきたので、こちらも伸ばし返し、口付けるよりも先にペロが絡み合った。令嬢の感じる息遣いが直接口元に当たってきて、興奮と性悦の強さが伝わってくるようだ。

「ぺちよ、れるれるる〜お、ぺちゆる、ぢゆるう……っ！ ねぶり合う音が車内に響き渡り、唾液とアナル粘膜の卑猥な香りが混ざり合う。」

「んはア、猥褻物なわたくしを、あんっ、も、もっろ、 虐げへえっ！」  
涎が早紀の口元から漏れていった。激しく揺らされる巨乳の上に滴って、自らを汚していく。

「じゃ、じゃあ、またブヒブヒ鳴いてごらん。ほら、運転席のメイドさんも聞いてくれる」



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

# ハーレムシリーズ

## 公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、  
「歴史年表」「人物相関図」  
等々あの超人気シリーズの  
世界観を網羅した  
**完全ガイドが登場!!**

特別描き下ろし  
イラストも多数収録!



*Now On Sale!!*

A5判/定価990円(税込)

特設サイトはこちらからアクセス!!

<http://ktcom.jp/harem/>

# キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな  
ハーレム系ライトノベル!

二次元  
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!  
かなり過激なライトノベル!

二次元  
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※二次元ドリーム文庫は、全編の方向性まできまっています。

日常に密着したエロス、リアルな  
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?  
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの  
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!





**ヴァルキリー**

<http://www.comic- Valkyrie.com/>

**cranberry**

<http://www.cran-berry.com/>

**mille-feuille**

<http://www.mille-feuille.jp/>

**モバイル二次元ドリーム**

<http://www.2d-dream.jp/>

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!